

備忘録

寺田寅彦

青空文庫

仰臥漫録

何度読んでもおもしろく、読めば読むほどおもしろさのしみ出して来るものは夏目先生の「修善寺日記」と子規の「仰臥漫録」とである。いかなる戯曲や小説にも到底見いだされないおもしろみがある。なぜこれほどおもしろいのかよくわからないがただどちらもあらゆる創作の中で最も作為の跡の少ないものであつて、こだわりのない叙述の奥に隠れた純真なものがあらゆる批判や估価を超越して直接に人を動かすのではないかと思う。そしてそれは死生の境に出入する大患と、なんらかの点において非凡な人間との偶然な結合によつてのみ始めて生じうる文辞の宝玉であるからであらう。

岩波文庫の「仰臥漫録」を夏服のかくしに入れてある。電車の中でも時々読む。腰かけられない時は立ったままで読む。これを読んでいると暑さを忘れ距離を忘れる事ができる。

「朝 ヌク飯三ワン 佃煮 梅干 牛乳一合ココア入り 菓子パン 塩センベイ……」

こういう記事が毎日毎日繰り返される。それが少しもむだにもうるさくも感ぜられない。読んでいる自分はそのたびごとに一つ一つの新しき朝を体験し、ヌク飯のヌクミとその香

を実感する。そして著者とともに貴重な残り少ない生の一日一日を迎えるのである。牛乳一合がココア入りであるか紅茶入りであるかが重大な問題である。それは政友会せいゆうかいが内閣をとるか憲政会けんせいかいが内閣をとるかよりははるかに重大な問題である。

昼飯に食った「サシミノ残り」を晩飯に食ったという記事がしばしば繰り返されている。この残りの刺身さしみの幾片かのイメージがこの詩人の午後の半日の精神生活の上に投げた影はわれわれがその文字の表面から軽々に読過するほどに希薄なものではなく、卑近なものでもなかったであろう。

この病詩人を慰めるためにいろいろのものを贈って来ていた人々の心持ちの中にもさまざまな複雑な心理が読み取られる。頭の鋭い子規はそれに無感覚ではなかったろう。しかし子規は習慣の力でいろいろの人からいろいろのものをもらうのをあたかも当然の権利でもあるかのようにきわめて事務的に記載している。この事務的散文的記事の紙背には涙がある。

頭が変になつて「サアタマランサアタマラン」「ドーシヨウドーシヨウ」と連呼し始めるところがある。あれを読むと自分は妙に滑稽こっけいを感じる。絶体絶命くもんの苦悶でついに自殺を思うまでに立ち至る記事が何ゆえにおかしいのか不思議である。「マグロノサシミ」に

悲劇を感じる私はこの自殺的一幕に一種の喜劇を感得する。しかし、もしかするとその場合の子規の絶叫はやはりある意味での「笑い」ではなかったか。これを演出しこれを書いたあとの子規はおそらく最も晴れ晴れとした心持ちを味わったのではないか。

夏目先生の「修善寺日記」には生まれ返った喜びと同時にほかなるかな彼方かなたの世界への憧憬どうけいが強く印せられていて、それはあの日記の中に珠玉のごとくちりばめられた俳句と漢詩の中に凝結している。子規の「仰臥漫録ぎようがまんろく」には免れ難い死に直面したあの子規しきしの此方こなたの世界に対する執着が生々しいリアルな姿で表現されている。そしてその表現の効果の最も強烈なものは毎日の三度の食事と間食とのこくめいな記録である。「仰臥漫録ぎようがまんろく」から「ヌク飯」や「菓子パン」や「マグロノサシミ」やいろいろの、さも楽しみそうに並べしるしたごちそうを除去して考える事は不可能である。

「仰臥漫録ぎようがまんろく」の中の日々の献立表は、この命がけで書き残された稀有けうの美しい一大詩編の各章ごとに規則正しく繰り返されるリフレインでありトニカでなければならぬ。

夏

近年になって、たぶん大正八年の病氣以来の事と思うが、毎年夏の来るのが一年じゅうのいちばんの楽しみである。朝起きると寒暖計が八十度近くに来ているようになると、もう水で顔や頭髮を洗つても悪寒おかんを感じず、足袋たびをはかなくても足が冷えない。これだけでもありがたい事である。自分のからだじゅうの血液はじめてどこにも停滞する事なしに毛細管の末梢まつしょうまでも自由に循環する。たぶんそのためであろう、脳のほうが軽い貧血を起こして頭が少しぼんやりする。聴覚も平生よりいつそう鈍感になる。この上もなく静寂で平和な心持ちである。

昼間暑い盛りに軽い機械的な調べ仕事をするのも気持ちがいい。あまり頭を使わないで、そしてすればするだけ少しずつ結果があがって行くから知らず知らず時を忘れ暑さを忘れる。

陶然として酔うという心持ちはどんなものか下戸げこの自分にはよくわからない。少なくとも酒によつては味わえない。しかし暑い盛りに軽い仕事をして頭のぼうっとした時の快感がちようどこの陶然たる微酔の感と同様なものではないかと思われる。そんなとき蟬せみでもたくさん来て鳴いてくれるといいのであろうが、このへんにはこの夏のオーケストラがないで残念である。

喫茶店きつさてんの清潔なテーブルへすわって熱いコーヒーを飲むのも盛夏の候にしくものはな

い。銀器の光、ガラス器のきらめき、一輪ぎしの草花、それに蜜蜂みつばちのうなりに似たファンの楽音、ちようどそれは「フォーヌの午後」に表わされた心持ちである。ドビュッシーはおそらく貧血性の冷え症ではないかと想像される。

夜も夏は楽しい。中庭へ籐椅子とういすを出して星をながめる。スコルピオン座や蟹座かにざが隣の栗くりのこずえに輝く。ことしは花壇の向日葵ひまわりが途方もなく生長して軒よりも高くなった。夜目にも明るい大きな花が涼風にうなづく。

人のいやがる蚊も自分にはあまり苦にならない。中学時代にひと夏裏の離れ屋の椅子に腰かけて読書にふけり両足を言葉どおりにすきまなく蚊に食わせてから以来蚊の毒に免疫となつたせい、涼み台で手足を少しぐらい食われてもほとんど無感覚である。蚊のいない夏は山葵わさびのつかない鯛たいの刺身さしみのようなものかもしれない。

夕立の来そうな晩ひとり二階の窓に腰かけて雲の変化を見るのも楽しいものである。そういう時の雲の運動はきわめて複雑である。方向も速度も急激に変化する。稲妻でもすればさらにおもしろい。いかなる花火もこの天工のものには及ばない。

来そうな夕立がいつまでも来ない。十二時も過ぎて床にはいつて眠る。夜中に沛然はいぜんた

る雨の音で目がさめる。およそこの人生に一文も金がかからず、無条件に理屈なしに楽しいものがあるとすれば、おそらくこの時の雨の音などがその一つでなければならぬ。これは夏のきらいな人にとつてもたぶん同じであろうと思う。

冬を享樂するのには健康な金持ちでなければできない、それに文化的の設備が入用である。これに反して夏は貧血症の貧乏人の樂園であり自然の子の天地である。

涼味

涼しいという言葉の意味は存外複雑である。もちろん単に気温の低い事を意味するのではない。継続する暑さが短時間減退する場合の感覚をさして言うものとも一応は解釈される。しかし盛夏の候に涼味として享樂されるものはむしろ高温度と低温度の急激な交錯であるように見える。たとえば暑中氷倉の中に一時間もはいつているのは涼しさでなくて無気味な寒さである。扇風機の間断なき風は決して涼しいものではない。

夏の山路を歩いていると暑い空気のかたまりと冷たい空気のかたまりとが複雑に混合しているのを感じる。そのかたまりの一つ一つの粒が大きい事もあるし小さい事もある。こ

の粒の大きさの適当である時に最大の涼味を感じさせるようである。しかしまだこの意味での涼味の定量的研究をした学者はない。これは気象学者と生理学者の共同研究題目として興味あるものであろう。

倉庫や地下室の中の空気は温度がほとんど均等でこのような寒暑の粒の交錯がない、つまり空気が死んでいる。これに反して山中の空気は生きている。温度の不均等から複雑な熱の交換が行なわれている。われわれの皮膚の神経は時間的にも空間的にも複雑な刺激を受ける。その刺激のために生ずる特殊の感覚がいわゆる涼しさであろう。

暑中きゅうに灸をすえる感覚には涼しさに似たものがある。暑い盛りに熱い湯を背中へかける感じも同様である。これから考えられる一つの科学的の納涼法は、皮膚のうちの若干の選ばれた局部に適当な高温と低温とを同時に与えればわれわれはそれだけで涼味の最大なるものを感じうるのではないか。あるいは一局部に適当な週期で交互に熱さと寒さを与えるのがいいかもしれない。これは実験生理学者にとって好箇こうこの研究題目となりそうなのである。

この仮説を敷衍ふえんすれば、熱い酒に冷たい豆腐のひややつこ、アイスクリームの直後のホットカフェーの賞美されるのもやはり一種の涼味の享樂だという事になる。

皮膚の感覚についてのみ言われるこの涼味の解釈を移して精神的の涼味の感じに転用する事はできないか、これもまた心理学者の一問題となりうるであろう。

向日葵

中庭の籐椅子とういすに寝て夕ばえの空にかがやく向日葵ひまわりの花を見る。勢いよく咲き盛る花のかたわらにはもうしなびかかってまつ黒な大きな芯しんの周囲に干ひからびた花卉をわずかにとどめたがある。大きくなりそなつてまね事のように、それでもこの花の形だけは備えて咲いているのもある。大きな葉にも完全なのは少なく、虫の食ったのや、半分黒くなつて枯れしぼんだのもある。そういう不ぞろいなものを引つくるめたすべてが生きたリアルな向日葵の姿である。しおれた花、虫ばみ枯れかかった葉を故意にあさはかな了りようけん簡で除いて写した向日葵の絵は到底リアルな向日葵の絵ではあり得ない。

精巧をきわめたガラス細工の花と真実の花との本質的な相違はこういう点にもある。写実を尊んで理想を一概に排斥する極端論者の説にも一理はある。実際ある浅薄な理想主義の芸術はまさにしんこ細工の花のようなものである。しかしそうかと言って虫食いや黴ばいき

菌^んのために変色した葉ばかりを強調した表現主義にも困る、ドイツあたりの近ごろの絵画にはそんな傾向が見えるのもありはしないか。

物理学上の文献の中でも浅薄な理論物理学者の理論的論文ほど自分にとってつまらないものはない。論理には五分もすきはなく、数学の運算に一点の誤^{ごびゆう}謬^{めう}はなくても、そこに取り扱われている「天^{ネチユアー}然^ー」はしんこ細工の「天然」である。友禪の裾^{すそもよう}模様^{よう}に現われたネチユアーである。底の知れない「真」の本体はかえってこのためにおおわれ隠される。こういう、たとえば花を包んだ千代紙のような論文がドイツあたりのドクトル論文にはおり見受けられる。

ほんとうにすぐれた理論物理学者の論文の中には、真に東洋画特に南画中の神品を連想させるものがある。一見いかに粗略でしかも天然を勝手にゆがめて描いてあるようでも、そこにつかまれてあり表現されてあるものは生きた天然の奥底に隠れた生きた魂である。こういう理論はいわゆる *fecund* な理論でありそれに花が咲き実を結んで人間の文化に何物かを寄与する。

理想芸術でもすぐれた南画まで行けば科学的にも立派であるように理論物理学もいいものになるとやはり芸術的にも美しい。

純粹な実験物理学者は写実主義の芸術家と似通った点がある。自分の目で自分の前のむき出しの天然を観察しなければならない。それが第一義でありまた最大の難事であるのに、われわれの目は伝統に目かくしされ、オーソリテイの光に眩惑げんわくされて、天然のありのままの姿を見失いやすい。現在目の前に非常にもしろい現象が現われていても、それが權威の文献に現われてない事であると、それはたぶんはつまらない第二義の事がらのように思われて永久に見のがされてしまう。われわれの目はただ西洋のえらい大家の持ち扱い古した、かびのはえた月並みの現象にのみ目を奪われる。そして征服者の大軍の通り去った野に落ちちらばった弾殻たまがらを拾うような仕事に甘んじると同じような事になりがちである。写実画派の後裔こうえいの多数はただ祖先の目を通して以外に天然を見ない。元祖の選んだ題材以外の天然を写すものは異端者であり反逆者である。

ひまわり
向日葵の花を見ようとするのとわれわれの目にはすぐにヴァン・ゴーホの投げた強い伝統の光の目つぶしが飛んで来る。この光を青白くさせるだけの強い光を自分自身の内部から発射して、そうして自分自身の向日葵を創造する事の困難を思うてみる。それはまさにおそらくあらゆる科学の探究に従事するものの感ずる困難と同種類のものでなければならぬ。

線香花火

夏の夜に小庭の縁台で子供らのもてあそぶ線香花火にはおとなの自分にも強い誘惑を感じる。これによって自分の子供の時代の夢がよみがえって来る。今はこの世にない親しかった人々の記憶がよび返される。

はじめ先端に点火されてただかすかにくすぶっている間の沈黙が、これを見守る人々の心をまさにきたるべき現象の期待によって緊張させるにちようど適当な時間だけ継続する。次には火薬の燃焼がはじまって小さな炎が牡丹ぼたんの花弁のように放出され、その反動で全体は振り子のように揺動する。同時に灼しやくねつ熱ねつされた熔融塊ようゆうかいの球がだんだんに生長して行く。炎がやんで次の火花のフェーズに移るまでの短い休止期ポーズがまた名状し難い心持ちを与えるものである。火の球は、かすかな、ものの煮えたぎるような音を立てながら細かく震動している。それは今にもほとぼしり出ようとする勢エネルギー力が内部に渦巻うずまいている事を感じさせる。突然火花の放出が始まる。目に止まらぬ速度で発射される微細な火弾が、目に見えぬ空中の何物かに衝突して砕けでもするように、無数の光の矢束となって放散する、

その中の一片はまたさらに碎けて第二の松葉第三第四の松葉を展開する。この火花の時間的ならびに空間的の分布が、あれよりもつと疎であつてもあるいは密であつてもいけないであろう。実に適当な歩調と配置で、しかも充分な変化をもつて火花の音楽が進行する。

この音楽のテンポはだんだんに早くなり、密度は増加し、同時に一つ一つの火花は短くなり、火の矢の先端は力弱くたれ曲がる。もはや爆裂するだけの勢力のない火弾が、空気の抵抗のためにその速度を失つて、重力のために放物線を描いてたれ落ちるのである。莊重なラルゴで始まったのが、アンダンテ、アレグロを経て、プレスティシモになったと思うと、急激なデクレスセンドで、衰れにさびしいフィナーレに移つて行く。私の母はこの最後のフェーズを「散り菊」と名づけていた。ほんとうに単弁の菊のしおれかかったような形である。「チリギクチリギクく」こう言つてはやして聞かせた母の声を思い出すと、自分の故郷における幼時の追懷が鮮明によび返されるのである。あらゆる火花のエネルギーを吐き尽くした火球は、もろく力なくポトリと落ちる、そしてこの火花のソナタの一曲が終わるのである。あとに残されるものは淡くはかない夏の宵よいやみ闇である。私はなんとなくチャイコフスキーのパステイクシンフォニーを思い出す。

実際この線香花火の一本の燃え方には、「序破急」があり「起承転結」があり、詩があ

り音楽がある。

ところが近代になつてはやり出した電気花火とかなんとか花火とか称するものはどうであらう。なるほどアルミニウムだかマグネシウムだかの閃^{せんこう}光は光度において大きく、ストロンチウムだかりチウムだかの炎の色は美しいかもしれないが、始めからおしまいまでただぼうぼうと無作法に燃えるばかりで、タクトもなければリズムもない。それでまたあの燃え終わりのきたなさ、曲のなさはどうであらう。線香花火がベートーヴェンのソナタであれば、これはじやかじやかのジャズ音楽である。これも日本固有文化の精粹がアメリカの香のする近代文化に押しつけられて行く世相の一つであるとも言いたくなるくらいのものである。

線香花火の 灼^{しゃく}熱^{ねつ}

あの現象がいかなる作用によるものであるかという事は興味ある物理学上ならびに化学上の問題であつて、もし詳しくこれを研究すればその結果は自然にこれらの科学の最も重要な基礎問題に触れて、その解釈はなんらかの有益な貢献となりうる見込みがかなりに多くあるだろうと考えられる。それで私は十余年前の昔から多くの人にこれの研究を勧誘して来た。特に地方の学校にでも奉職していて充分な研究設備をもたない人で、何かしらオリ

ジナルな仕事がしてみたいというような人には、いつでもこの線香花火の問題を提供した。しかし今日までまだだれもこの仕事に着手したという報告に接しない。結局自分の手もとでやるほかはないと思つて二年ばかり前に少しばかり手を着けはじめてみた。ほんの少しやつてみただけで得られたわずかな結果でも、それははなはだ不思議なものである。少なくもこれが将来一つの重要な研究題目になりうるであろうという事を認めさせるには充分であつた。

このおもしろく有益な問題が従来だれも手を着けずに放棄されてある理由が自分にはわかりかねる。おそらく「文献中に見当たらない」、すなわちだれもまだ手を着けなかつたという事自身以外に理由は見当たらないように思われる。しかし人が顧みなかつたという事はこの問題のつまらないという事には決してならない。

もし西洋の物理学者の間にわれわれの線香花火というものが普通に知られていたら、おそらくとうの昔にだれか一人や二人はこれを研究したものがあつたろうと想像される。そしてその結果がもし何かおもしろいものを生み出していたら、わが国でも今ごろ線香花火に関する学位論文の一つや二つはできたであらう。こういう自分自身も今日まで捨ててはおかなかつたであらう。

近ごろフランス人で刃物を丸砥石まるといしでとぐ時に出る火花を研究して、その火花の形状からその刃物の鋼鉄の種類を見分ける事を考えたものがある。この人にでも提出したら線香花火の問題も案外早く進行するかもしれない。しかしできる事なら線香花火はやはり日本人の手で研究したいものだと思う。

西洋の学者の掘り散らした跡へはるばる遅ればせに鉞石の欠けらを捜しに行くもいいが、われわれの足元に埋もれている宝をも忘れてはならないと思う。しかしそれを掘り出すには人から笑われ狂人扱いにされる事を覚悟するだけの勇気が入用である。

金米糖

金米糖こんべいとうという菓子は今日ではちよつと普通の菓子屋駄菓子屋だがしやには見当たらない。聞いてみるとキャラメルやチョコレートにだんだん圧迫されて、今ではこれを製造するものがきわめてまれになったそうである。もつと小粒で青黄赤などに着色して小さなガラスびんに入れて売っているのがあるが、あれは少し製法がちがうそうである。

この金米糖のできあがる過程が実に不思議なものである。私の聞いたところでは、純良

な砂糖に少量の水を加えて鍋なべの中で溶かしてどろどろした液体とする。それに金米糖の心核となるべき芥子粒けしつぶを入れて杓子しゃくしで攪拌かくはんし、しゃくい上げしゃくい上げしていると自然にああいう形にできあがるのだそうである。

中に心核があつてその周囲に砂糖が凝固してだんだんに生長する事にはたいした不思議はない。しかしなぜあのように角つのを出して生長するかが問題である。

物理学では、すべての方向が均等な可能性をもっていると考えられる場合には、シメント対

リの考えからすべての方面に同一の数量を付与するを常とする。現在の場合に金米糖が生長する際、特にどの方向に多く生長しなければならぬという理由が考えられない、それゆえに金米糖は完全な球状に生長すべきであると結論したとする。しかるに金米糖のほうでは、そういう論理などには頓とん着ちやくなく、によきによきと角を出して生長するのである。これはもちろん論理の誤謬ごびゆうではない。誤った仮定から出発したために当然に生まれた誤った結論である。このパドックスを解く鍵かぎはどこにあるかという、これは畢ひつきよう竟、統計的平均についてはじめて言われうるすべての方向の均等性という事を、具体的に個体にそのまま適用した事が第一の誤りであり、次には平均からの離背が一度で始めるとそれがますます助長されるいわゆる不安定の場合のある事を忘れたのが第二の誤りである。

平均の球形からの偶然な統計的異同 Fluctuation が、一度少しでもできて、そうしてそのためにできた高い所が低い所よりも生長する割合が大きくなるという物理的条件さえあればよい。現在の場合にこの条件が何であるかはまだよくわからないが、そのような可能性はいくらも考え得られる。

おもしろい事には金米糖の角の数がほぼ一定している、その数を決定する因子が何であるか、これは一つのきわめて興味ある問題である。

従来の物理学ではこの金米糖の場合に問題となつて来るような個体のフラクチュエーションの問題が多くは閑却されて来た。その異同がいつも自働的に打ち消されるような条件の備わつた場合だけが主として取り扱われて来た。そうでない不安定の場合は、言わば見ても見ぬふりをして過ぎて来た。畢^{ひつきよう} 竟はそういうものをいかにして取り扱つてよいかという見当がつかかなかつたせいもあるうが、一つにはまた物理学がその「伝統の岩窟^{がんくつ}」にはまり込んで安きを偷^{ぬす}んでいたためとも言われうる。

物理学上における偶然異同の現象の研究は近年になつていくらか新しい進展の曙光^{しよこう}を漏らし始めたように見えるが、今のところまだまだその研究の方法も幼稚で範囲もはなはだ狭い。

そういう意味から、金米糖の生成に関する物理学的研究は、その根本において、将来物理学全般にわたつての基礎問題として重要なべきあるものに必然に本質的に連関して来るものと言つてもよい。

同じ意味で将来の研究問題と考えられる数々の現象の一つは、リヒテンベルクの放電図形である。これも従来はほとんど骨董的こつとうてきだいもく題目として閑却され、たまたまこれを研究する好事家こうずかは多くの学者の嘲笑ちやうしやうを買つたくらいである。ところが皮肉な事には最近に至つてこの現象が電気工学で高圧の測定に應用される可能性が認められるようになって、だんだんこの研究に従事する人の数を増すように見える。しかし今までのところまだこれもこの現象の成因について説明を試みた人はない。しかるにこの現象はその根本の性質上のずから金米糖の生成とある点まで共通な因子をもっている。そしておそらく将来ある「一つの石によつて落とさるべき二つの鳥」である。

生物学上の「生命」の問題に対しては、今のところ物理学はなんら容喙ようかいの権利をもたない。ロード・ケルヴィンは地球上の生命の種子が光圧によつて星の世界から運ばれたという想像を述べた。しかしそれは生命そのものの起原に対しては枝葉の問題である。今のままの物理学ではおそらく永久に無力であろうが、もし物理学上の統計的異同の研究が今

後次第に進歩して行けばこの方面から意外の鍵^{かぎ}が授けられて物質と生命との間に橋を架ける日が到着するかもしれないという空想が起る。

街上を往来している人間の数についてある統計を取ってみると、その結果は、個々の人間もあたかも無生のガス分子でもあると同様な統計的分布を示す事が証明される。もし人間以外のあるものが他の世界からこれら街上の人間についてただこのような統計的分布に関係した事からのみを観察していたならば、そのものの目には、人間は無生の微分子としか見えないであろう。そうして、その同じ微分子が、一方で有機的な国家社会的の機関を構成しているのを見てその有機体の生命の起原を疑い怪しむに相違ない。

このアナロジーから喚起される一つの空想は、もしや生命の究極の種が一つ一つの物質分子の中にすでに備わっているのではないかという事である。物理学者はおそらくただその統計的の現われのみを観察しているのではないだろうか、そうして無生の微粒と想っているものが生物という国家を作り社会を組織しているのに会って驚き怪しんでいるのではないだろうか。

同一元素の分子の個々のものに個性の可能性を認めようとした人は前にもあった。ついでに原子個々にそれぞれ生命を付与する事によって科学の根本に横たわる生命と物質の二

元をひとまとめにする事はできないものだろうか。

金米糖の物理から出発したのが、だんだんに空想の梯子はしごをよじ登って、とうとう千古の秘密のなぞである生命の起原にまでも立ち入る事になったのはわれながら少しく脱線であると思う。近年の記録を破ったことしの夏の暑さに酔わされた痴人の酔中語のようなものであると見てもらうほうが適当かもしれない。

それにしてもこのおもしろい金米糖が千島アイヌかなんぞのように滅びて行くのは惜しい。天然物保存に骨を折る人たちは、ついでにこういうものの保存も考えてもらいたいものである。

風呂の流し

風呂ふろの流しいわゆる三助さんすけというものはいつの世に始まったものか知らないが考えてみると妙な職業である。大きな宿屋などの三助でもあれば、あたりまえなら接近する事も困難なような貴顕のかたがたを丸裸にしてその肢体したいを大根かすりこぎでもあるように自由に取り扱って、そうしておしまいは肩や背中をなぐりつけ、ひねくり回すのである。

また昔西洋の森の中にすんでいたサティールでもなければ見られなかったはずの美しいニンフたちの姿を、なんら罰せらるる事なしに日常に鑑賞し賛美する特権をもっているわけである。

西洋にも同じような職業があったと見えて、古い木版画でその例を見た事がある。大きな青竜刀の柄を切ったようなものをさげていて、これでごしごし垢でもこするのではないかと思われた。やはり禪のようなものをしているのがおもしろかった。

私は銭湯へ通っていた時代にも、かつてこの流しをつけた事がない。自分でも洗えば洗われる自分の五体を、どこのだれだかわからぬ男に渡してしまつて物品のように取り扱われる氣にどうしてもなれなかつたのである。

しかし、困つた事には旅行をして少し宿屋らしい宿屋に泊まると、きつと強制的にこの流しをつけられる。これは断わればいいのかかもしれないが、わざわざ断わるのもぐあいが悪いので観念して流させる事にしている。非常に気持ちが悪い。ことにいちばん困るのは按摩のつもりでやせた肩をなぐりつけ捻りつけられる事である。頭や腹へ響いて苦痛を感じる。もうたぐさんであると言つても存外すぐにはやめてくれない。誠に迷惑である。丁寧なのになると、流しが終わつてもいつまでもそばについていて、最後にタオルまです

いってくれる。監視されながらの入浴はなんとなく気づまりでこれも迷惑である。

友人たちにこの事を話してみるに、自分に同情する人はまだない。ある人は流しになるべく念入りで按摩も十二分にやらないと不愉快であるという。また一人は旅行中宿屋の風呂の流しで三助からその土地の一般的知識を聞き出すのが最も有効でまた最も興味があるというのである。

そうしてみると、世の中には、多くの人に喜ばれる流しをはなはだしく嫌忌する人間もまれにはあるという事実を一つの事実として記録しておく事もむだではないかもしれない。ついでながら精神的の方面でこの風呂の三助に相当する職業もあるようである。心の垢を落とすのも、からだの垢を落とすのも、商売となれば似たものではないだろうか。この心の三助に対しても私は取捨の自由を与えらるる事を希望するものである。

調律師

種々な職業のうちでピアノの調律師などは、当人にはとにかく、はたから見ても比較的きれいで品の悪くないものである。だんだん西洋音楽の普及するに従ってこの仕事に対する

要求が増加するので、従業者の数もこれに応じて増加しつつあるにかかわらず、いつも商売が忙しうである。

ピアノでもすてあろうという室ならばたいいあまり不愉快でないだけの部屋^{へや}ではあるだろうと思う。そうして応接する人間もたぶんはそれほど無作法に無礼でもなさそうに想像される。

たくさんな弦線の少しずつ調子の狂ったのを、一定の方式に従って順々に調節して行く。鍵盤^{けんぱん}のアクションのぐあいの悪いのを一つ一つたねんに検査して行く。これは見ていても気持ちのいいものである。かゆい所をかくに類した感じがある。すっかり調律を終わってから、塵埃^{じんあい}を払い、ふたをして、念のために音階とコードをたたいてみていよいよこれで仕事を果たしたという瞬間はやはり悪い気持ちはしないであろうと想像される。

夏目先生の「草枕^{くさまくら}」の主人公である、あの画家のような心の目をもった調律師になつて、旅から旅へと日本国じゅうを回つて歩いたらおもしろかろうと考えてみた事もある。狂ったピアノのように狂っている世道人心を調律する偉大な調律師は現われてくれないものであろうか。せめては骨肉相食^{あいは}むような不幸な家庭、儕輩^{さいはい}相※^{あいせめ}ぐのようなあさましい人間の寄り合いを尋ね歩いて、ちぐはぐな心の調律をして回るような人はないものであろ

うか。

物語に伝えられた さいみょうじときより 最明寺時頼や講談に読まれる みとこうもん 水戸黄門は、おそらく自分では一種の調律師のようなつもりで遍歴したものであつたかもしれない。しかしおそらくこの二人は調律師もしたと同時にまたかなりにいい楽器をこわすような事もして歩いたかもしれない。調律師の職業の一つの特徴として、それが尊い職業であるゆえんは、その仕事の上に少しの「我」を持ち出さない事である。音と音とは元来調和すべき自然の方則をもっている、調律師はただそれが調和するところまで手をかして導くに過ぎない。

いわゆるえらい思想家も宗教家もいらない。ほしいものはただ人間の心の調律師であると思う時もある。その調律師に似たものがあるとすればそれはいい詩人、いい音楽者、いい画家のようなものではないだろうか。

しかし世の中にはあらゆる芸術に無感覚のように見える人があり、またこれを嫌悪する けんお 人さえあるように見える。こういう人たちは「心のピアノ」を所有しない人たちである。従つて調律師などには用のない人である。そういう人はいわゆる「人格者」と称せられる部類の人種の中に多いように見受けられる。これはむしろ当然の事であろう。もたないピアノに狂いようはない。咲かない花に散りようはないと同じわけである。

芥川竜之介君

あくたがわりゆうのすけ
芥川竜之介君が自殺した。

私が同君の顔を見たのはわずかに三度か四度くらいのものである。そのうちの一度は夏目先生のたしか七回忌に雑司が谷の墓地である。大概洋服でなければ羽織袴を着た人たちのなかで芥川君の着流しの姿が目についた。ひどく憔悴したつやのない青白い顔色をしてほかの人の群れから少し離れて立っていた姿が思い出される。くちびるの色が著しくあかく見えた事、長い髪を手でなで上げるかたちがこの人の印象をいつそう憂鬱にした事などが目に浮かんて来る。参拝を終わってみんなが帰る時にK君が「どうだ、あとで来ないか」と言った時に黙ってただ軽く目礼をしただけであつたと覚えている。そんな事まで覚えているのは、その日の同君が私の頭に何か特別な印象を刻みつけたためかと思われる。

もう一度はK社の主催でA派の歌人の歌集刊行記念会といったようなものを芝公園のレストランで開いた時の事である。食卓で幹事の指名かなんかでテーブルスピーチがあ

った。正客の歌人の右翼にすわっていた芥川君が沈痛な顔をして立ち上がって、自分は何もここで述べるような感想を持ち合わさない。ただもしいて何か感じた事を述べよとならば、それは消化器の弱い自分にとって今夜の食卓に出されたパンが恐るべきかたいパンであつたという事であると言つて席についた。その夜の芥川君には先年雑司が谷の墓地で見た時のような心弱さといったようなものは見えなかった。若々しさと鋭さに緊張した顔容と話しぶりであつた。しかし何かしら重い病氣がこの人の肉体を内側から虫ばんでいる事はだれの目にもあまりに明白であつた。「恐るべきかたいパン」、この言葉が今この追憶を書いてある私の耳の底にありあり響いて聞こえる。そしてそれが今度の不慮の死に関する一つの暗示でもあつたような気がしてならない。

あの時同じ列にすわつた四五人の中でもう二人は故人となつた。そのもう一人は歌人のS・A氏である。

過去帳

丑女が死んだというしらせが来た。彼女は郷里の父の家に前後十五年近く勤めた老婢

である。自分の高等学校在学中に初めて奉公に来て、当時から病弱であつた母を助けて一家の庶務を処理した。自分が父の没後郷里の家をたたんでこの地へ引越す際に彼女は郷里の海浜の村へ歸つて行つた。彼女の家を立てるべき弟は日露戦争で戦死したために彼女はほんとうの一人ぼっちであつたので、他家に嫁した姉の女の子を養女にしてその世話をしているという事であつた。

母の存命中は時々手紙をよこしていたが、母の没後は自然と疎遠になつていたので今度の病気の事も知らないでいた。年とつてからはいろいろの病氣をもつていたそうであるから、たぶんはそのうちのどれかのために倒れたものであろう。

彼女はあらゆる意味で忠実な女であつた。物事を中途半端にすることのできないたちであつた。その性質は自然に往々「我」の強さの形をとつて現われた。また一方無学ではあるが女には珍しい明晰めいせきなあたまと鋭い觀察の目をもつていた。だれでもかまわず無作法にじつと人の顔を見つめる癖があつた、その様子が相手の目の中からその人の心の奥の奥まで見通そうとするようであつた。実際彼女にはそういう不思議な能力が多分にあつたように見える。人間の技巧の影に隠れた本性がそのままに見えるらしかつた。そういう点で彼女は多くの人からはむしろはばかりあるいは憎まれたようである。たださすがに女で

あるだけに自分自身の内部を直視する事はできなかったらしい。

ある時ある高い階級の婦人が衆人環視の中で人力車を降りる一瞬時の観察から、その人の皮膚のある特徴を発見してそれを人に話したので、実に恐ろしい女だと言つてそれが一つ話になった。

彼女は日本の女には珍しい立派な体格の所有者であつた。容貌ようぼうも醜くないルーベンス型に属していた。挙動は敏活でなくてむしろ鈍重なほうであつたが、それでいて仕事はなんでも早く進行した。頭がいいからむだな事に時を費やさないのである。そうして骨身を惜しむ事を知らないし、油を売る事をしらなかったせいであろう。

自分は彼女の忠実さに迷惑を感じる事も少なくなかつた。かまわないで打っちゃつておいてもらいたい事を決してそうはしてくれなかつた。つまり二つの種類のちがつたイーゴイストはこの点で到底相容あひいれる事ができなかったのであらう。

妙な事を思い出す。父の最後の病床にその枕まくらもと近く氷柱を置いて扇風器がかけてあつた。寒暖計は九十余度を越して忘れ難い暑い日であつた。丑女うしじょはその氷柱をのせたトタン張りの箱の中にとけてたまった水を小皿こいしでしゃくつては飲んでゐた。そんなものを飲んではいけなと言つて制したが、聞かないで何杯となくしゃくつては飲んでゐた。彼女の

目の周囲には紫色の輪ができていた事をはっきり思い出す事ができる。

昨年母の遺骨を守って帰省した時に、丑女はわざわざ十里の道を会いに来てくれた。その時彼女の髪の毛に著しく白いものが見えて来たのに気がついた。自分の年老いた事を半分自慢らしく半分心細そうに話した。たぶんことで五十二三歳であつたろうと思う。

自分の若かった郷里の思い出の中にまざまざと織り込まれている親しい人たちの現実の存在がだんだんに消えてなくなつて行くのはやはりさびしい。たとえば生きていてももう再び会う事があるかどうかともわからず、通り一ぺんの年賀や暑中見舞い以外に交通もない人は、結局は思い出の国の人々であるにもかかわらず、その死のしらせはやはり桐きりの一葉のさびしさをもつものである。

雑記帳の終わりのページに書き止めてある心覚えの過去帳をあけて見るとごく身近いものだけでも、故人となつたものがもう十余人になる。そのうちで半分は自分より年下の者である。これらの人々の追憶をいつかは書いておきたい気がする、しかしそれを一々書けば限りはなく、それを書くという事はつまり自分の生しょうがい涯がいの自叙伝を書く事になる。これは容易には思い立てない仕事である。そうしておそらくそれを書き終わるより前に自身_{自身}がまただれかの過去帳中の人になるであらう。

身近い人であればあるほどその追憶の荷はあまりに重くて取り上げようとする筆の運びを鈍らせる。ただ思い出の国の国境に近く住むような人たちの事だけが比較的やすらかな記録の資料となりうるようである。

自分の過去帳に載せらるべくしてまだ載せられてないものには三匹の飼^{ねこ}猫がある。不思議な事には追懷の国におけるこれらの家畜は人間と少しも変わらないものになってしまっている。口もきけば物もいう。こちらの心もそのままによく通ずる。そうして死んだ人間の追憶には美しさの中にも何かしら多少の苦^{にが}みを伴なわない事はまれであるのに、これらの家畜の思い出にはいささかも苦^{にが}々しさのあと味がない。それはやはり彼らが生きている間に物を言わなかったためであろう。

猫の死

「玉^{たま}」は黄色に褐^{かつしよく}色の虎斑^{とらふ}をもった雄猫であつた。粗野にして滑稽^{こっけい}なる相貌^{そうぼう}をもち、遅鈍にして大食であり、あらゆるデリカシーというものを完全に欠如した性格であつた。従つて家内じゅうのだれにも格別に愛せられなかった。小さい時分は一家じゅうの寵^ち

児ようじである「三毛」の遊戯の相手としての「道化師クラウン」として存在の意義を認められていたのが、三毛も玉も年を取って、もうそう活発な遊戯を演ずる事がなくなつてからは、彼は全く用のない冗員として取り扱われていた。もちろんそれに不平らしい顔もなく、空々寂々として天命を楽しんでいるかのようにも思われた。

ただ一つ困つた事にはこの僧侶そうりよのような玉にもやはり春の目さめる日はあつた。さかりがつくと彼は所かまわず尿水を飛ばして襖ふすまや器具をよごした。あまりやかいをかけるから家族のほうから玉を追放したいという動議が出た。そうしないでこの悪癖を直す方法はないかと思つて獣医に相談すると、それは去勢さえすればよいとの事であつた。いくら猫ねこでもそれは残酷な事で不愉快であつたが、追放の衆議の圧迫に負けてしまつてとうとう入院させて手術を受けさせた。

手術後目立つておとなしく上品にはなつたが、なんとなく影の薄い存在となつたようである。それからまもなくある日縁側で倒れて氣息の絶え絶えになつてゐるのを発見して水やまたたびを飲ませたら一時は回復した。しかしそれから二三日とたたないある朝、庭の青草の上に長く冷たくなつてゐるのを子供が見つけて来て報告した。その日自分は感冒で発熱して寝ていたが、その死骸しかいをわざわざ見る気がしなかつたから、ただそのままに裏の

桃の木の根方に埋めさせた。目で見なかった代わりに、自分の想像のキャンバスの上には、美しい青草の毛氈もうせんの上に安らかに長く手足を延ばして寝ている黄金色の猫の姿が、輝くような強い色彩で描かれている。その想像の絵が実際に目で見ただけであらうよりもはるかに強い現実さをもつて記憶に残っている。

「三毛」はいろいろの点において「玉」とはまさに対蹠たいせきてき的の性質をもった雌猫であつた。だからもきれいとほめられる容貌ようぼうと毛皮をもつて、敏捷びんしょうで典雅な挙止を示すと同時に、神経質な気むずかしさをもっていた。もちろん家族の皆からかわいがられ、あらゆる猫へのごちそうと言えはこの三毛のためにのみ設けられた。せっかく与える魚肉でも少し古ければ香をかいだままで口をつけない。そのお流れをみんな健啖けんたんな道化師の玉が頂ち戴ようだいするのであつた。

満七年の間に三十匹ほどの子猫の母となつた。最後の産のあとで目立って毛が脱けた。次第に食欲がなくなり元気がなくなつた。医師に見てもらうとこれは胸に水を持ったので治療の方法がないとの事であつた。この宣告は自分たちの心を暗くした。そのころはもう一日ほとんど動かずに行儀よくすわっていて、人が呼ぶとまぶしそうな目をしばたいて呼ぶ人の顔を見た。そうしていつものように返事を鳴こうとするが声が出なかつた。

最後の近くなつたころ妻がそばへ行つて呼ぶと、わずかにはい寄ろうとする努力を見せたが、もう首がぐらぐらしていた。次第に死の迫つて来る事を知らせる息づかいが人間の場合に非常によく似ていた。

遺骸^{いがい}は有り合わせのうちでいちばんきれいなチヨコレートのあき箱を選んでそれに収め、庭の奥の楓^{かへで}の陰に埋めて形ばかりの墓石をのせた。

玉が死んだ時は、自分が病気で弱つていたせいかなんとかなく感傷的な心持ちがした。だれにもかわいがられずに生きて来てだれにも惜しまれずに死んで行くのがかわいそうであつた。しかし三毛の死はみんなが惜しんでいるという自覚が自分の心の負担をいくぶん軽くするように思われるのであつた。三毛の死後数日たつて後のある朝、研究所を出て深^{ふか}川^わへ向かう途中の電車で、ふいと三毛の事を考えた。そして自然にこんな童謡のようなものが口ずさまれた。「三毛のお墓に花が散る。こんこんごめの花が散る。芝にはかげろう鳥の影。小鳥の夢でも見ているか。」それからあとで同じようなものをもう三つ作つて、それに勝手な譜をつけていいかげんの伴奏をもつけてみた。こんな子供らしい甘い感傷を享^ね樂^こしうるのは対象が猫であるからであらう。

一月ぐらいたつて塩原^{しおばら}へ行つたら、そこの宿屋の縁側へ出て来た猫が死んだ三毛にそ

つくりであるのに驚いた。だんだん見慣れるに従って頭の中の三毛の記憶の影像が変化して眼前の生きたものに吸収され同化されて行く不思議な心理過程に興味を感じた。われわれが過去の記憶の重荷に押しつぶされずに今日を享樂して行けるのは単に忘れるという事のおかげばかりではなくまた半ばはこれと同じ作用のおかげであろうと思われた。

その後妻が近所で捨てられていた子猫こねこを拾って来た。大部分まっ黒でそれに少しの白を交えた雌猫であつた。額から鼻へかけての対称的な白ぶちが彼女の容貌ようぼうに一種のチャームを与えていた。著しく長くてしなやかなしっぽもその特徴であつた。相当大きくなつていながら通りがかりの人に捕えられるくらいであるから鷹揚おうようというよりはむしろ愚鈍ふずまであるかと思われた。しかしまた今までうちにいたどの猫にもできなかった自分で襖ふすまを明けて出はいりするという術を心得ていた。しっぽを支柱にしてあと足で長く立っていられるのもまたその特技であつた。この「チビ」は最初の産褥さんじょくでもろく死んでしまった。その後仙台せんだいへ行つてK君を訪問すると、そこにいた子猫がこれと全く生き写しなのでまた驚かされた。

今では「三毛」の孫に当たる子猫の雌を親類からもらつて来てある。容貌のみならずいろいろの性格に祖母の隔世遺伝がありあり認められるのに驚かされる事がしばしばある。

自分はこれまでもうたびたび猫の事を書いて来た。これからもまだ幾度となくそれをかくかもしれない。自分には猫の事をかくのがこの上もない慰藉いしやであり安全弁であり心の糧かてであるような気がする。

Miserable misanthrope の言葉が時々自分を脅かす。人間を愛したいと思う希望だけは充分にもつていながら、あさはかな「私」にさえぎられてそれができないで苦しんでいるわれわれが、小動物に対してはじめて純粹な愛情を傾けうるのは、これも畢ひつきよう竟はわれわれのわがままの一つの現われであろう。自分は猫ねこを愛するように人間を愛したいとは思わない。またそれは自分が人間より一段高い存在とならない限り到底不可能な事であろう。しかしそういう意味で、小動物を愛するという事は、不幸な弱い人間をして「神」の心をたとえ少しでも味わわしめうる唯一の手段であるかもしれない。

舞踊

死んだ「玉」は一つの不思議な特性をもっていた。自分が風呂場ふろばへはいる時によくいつしよにくつついて来る。そして自分が裸になるのを見てそこに脱ぎすてた着物の上にあが

つて前足を交互にあげて足踏みをする、のみならず、その爪^{つめ}で着物を引っかきまたもむような挙動をする。そして裸体の主人を一心に見つめながら咽喉^{のど}をゴロゴロ鳴らし、短いつばを立てて振動させるのであった。

この不思議な挙動の意味がどうしてもわからなかった。いかなる working hypothesis すらも思いつけなかった。むしろ一種の神秘的といったような心持ちをさえ誘われた。遠い昔の猫^{ねこ}の祖先が原始林の中に彷徨^{ほうこう}していた際に起こった原始人との交渉のあるシーンといったようなものを空想させた。丸裸のアダムに飼いならされた太古の野猫^{やびょう}のある場合の挙動の遠い遠い反響が今目前に現われているのではないかという幻想の起こることであつた。

猫が人間の喜びに相当するらしい感情の表現として、前足で足踏みをするのは、食肉獣の祖先がいい獲物を見つけてそれを引きむしる事をやったのとある関係があるのではないかという荒唐な空想が起こる。また一方原始的の食人種が敵人をほふってその屍^{しかばね}の前に勇躍するグロテスクな光景とのある関係も示唆される。空想の翼はさらに自分を駆って人間に共通な舞踊のインステinktの起原という事までもこの猫^{ねこ}の足踏みによって与えられたヒントの光で解釈されそうな妄想^{もうそつ}に導くのであった。

赤ん坊の胴を持つてつるし上げると、赤ん坊はその下垂した足のうらを内側に向かい合わせるようにする。これは人間の祖先の猿が手で樹枝からぶら下がる時にその足で樹幹を押しようとした習性の遺伝であろうと言った学者があるくらいであるから、猫の足踏みと文明人のダンスとの間の関係を考えてみるのも一つの空想としては許されるべきものであろう。

（昭和二年九月、思想）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第二巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年9月10日第1刷発行

1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行

1997（平成9）年5月6日第70刷発行

入力：（株）モモ

校正：かとうかおり

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

備忘録

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>